

ハイデガーのニーチェ

―ハイデガー『ニーチェの形而上学』をめぐる―

五十嵐 沙 千 子

ハイデガーはニーチェを何度も論じている。本論はそのなかでも最も端的にハイデガーの見方が現れている『ニーチェの形而上学』を取り上げて「ハイデガーのニーチェ」を明らかにしようと思う。

とはいえここで明らかにするのはハイデガーという眼を通して「ニーチェ」そのものではなく、ニーチェを眼差す「ハイデガーの眼」である。それは例えば写真家がひとつの花を写すときに描出されるのがむしろその花ではなくその写真家のありようであるのと同じである。ハイデガーはこう言うのだ、「以下のテキストにおいて、「叙述」と「解釈」は、相互に働きを及ぼしあっているため、何がニーチェの言葉から取り出されたものであり、また何が付け加えられたものであるか、がどこでも直ちに明確になるわけではない。もちろん、いかなる解釈も、テキストから事柄を取り出すことができるのみならず、誇らしげに主張はしなくとも、それ自身の事柄に基づく固有のものをそつと付け加えるこ

とができるのでなければならない。この付加は、素人であれば、解釈することなく自らがテキストの内容とみなしているものに照らして、読み込みすぎや恣意などとして必ず非難するものである。このとき、ニーチェの形而上学との「対決」は、問題にされないままである」(傍点、ハイデガー、傍点引用者(CASO 89))と。では、われわれもハイデガーと「対決」することを通して、この「ハイデガーの眼」を明らかにしていこう。そしておそらくは「ハイデガーの眼」に映ったニーチェというひとつの魂も。

I

ハイデガーはニーチェの「根本問題」を五つ挙げる。「力への意志」、「ニヒリズム」、「同一物の永劫回帰」、「超人」、「正義」がそれである。

しかしハイデガーによればこの五つの概念の関係は「依然とし

て隠蔽されたまま」(GAS077)であり、「ニーチェは、五つの根本語のいずれにも表題の独占的優位を認めず」「それだけですべての思想の接合を導きつるような優位を認めない」(GAS077)。むしろ「ニーチェの思惟は、各々の根本語の導きの内でそのつど全体を見通し、すべての調和の響きを聞き取ることによって、真理の内的な運動の内にとどまり続ける」(傍点引用者 GAS077)のだという。それら五語は一つ一つが独立した別の音ではない。それらは「一つ」の和音を構成する／どの根本語のなかにも他の根本語が、常に、響きあい、五音が常に全体として一つの調和した「ニーチェの思惟＝ニーチェという音楽」を表出しているのである。

ではその和音、「一つの調和したニーチェの思惟」とは何か。例えばニーチェの「力への意志」をハイデガーは次のように語る。

「意志」が何を意味するかは、誰もがいつでも自分の身に経験することができる。すなわち、意志するとは、何かを志すことである。「力」が何を意味するかは、誰もが日常の経験から知っている。すなわち、権力(Gewalt)を行使することである。……「力への意志」が権力行使の可能性を志すこと、力の所有を志すことであるのははっきりしてい

る。(傍点引用者 GAS011)

ハイデガーによればニーチェの「力への意志」とはまず明確な権力(Gewalt)への意志である。加えてハイデガーは、こう言う。

「力への意志」は、さらに「欠如の感情」を表現している。力「への意志」は、いまだことさらに力の所有ではない。すなわち、いまだ「力そのもの」ではない。……しかしこの力への意志は、力の掌握への衝動として、同時に、権力行使の純粋な欲望である。(GAS013)

「力への意志」とは端的に言えば「権力行使への意志」であり、権力を行使しようとする欲望である。だが「力への意志」が力への意志である限り、力がまだ無いこと、力が足りず「いまだことさらに力の所有ではない」ことが痛感される。力への意志を持つ者の感じる力への欲望と「欠如」とは一体である。彼にとって力はいつも欠如として感じられ、権力行使はいつも不全なのである。だからこそ力への意志は、それが存在する限り常に「もつと力が欲しい」／「力が足りない」と言う。「これでいい、充分だ」というのはもはや力への意志ではない。「力は、それがどこまでも力の向上であり、力における「より以上」を自らに命ずるときにのみ、そしてその間のみ、力である。力における単なる停止、一

つの段階での停滞は、それだけで無力の開始（C25014）なのである。「力への意志」とは、常に／その瞬間ごとに「この私の今ある力よりもっと大きな」「この私の今ある力よりもっと強い」権力への純粋な欲望である。

ではなぜ「力」が欲せられるのか？

自分が「主人」であるためにである。

ところで、意志するとは、主人であろうと、意志することである。……もしも意志が根本からひとえに命令であることなく、単に願望や志向のままであるなら、意志することとは決して主人で、あるうと、意志することではないであろう。（傍点引用者 C25013）

「力への意志」が「権力への純粋な欲望」であるかぎり、力への意志を持つ私は「権力を持つ私」＝「主人」であろうと意志する私である。そして「権力を持つ」ことが「権力を持てればよいの」と夢想したり「もし権力を持ったとしたら」「どうすれば権力が持てるだろう」と志向することではなく、単に権力を「持つ」ことである限りにおいて、「力への意志」を持つ私は「もし私に権力があれば」ではなく、単純に「私は権力を振るう」と言うのだ。それが、私が「主人であろうと、意志する」ことである⁽¹⁾。私は「権力を振るう者」＝「主人」であり、「他人の権力に従う者」

ではない。私は単純に「主人であろう」と意志するのである。この意志は「根本からひとえに命令である」。

命令することは、行為的に作用する諸々の可能性、方法、流儀、手段を意のままに指令するという仕方、主人であることである。命令において命令されることは、この指令の遂行である。命令において命令する者はこの指令に聴き従い、そうして自己自身に聴き従う。このようにして命令する者は、自己自身までも賭けることによって、自己自身を卓越しているのである。それとも、彼はそのときなお聴従しているのだろうか（聴き従うことができること、聞くことができること）。命令することは自己、超克であり、ときとして、聴き従うことより困難である。自己自身に聴き従えない者にのみ命令がなされなければならない。（傍点ハイドガー、傍点引用者 C25013）

命令する者は「主人」である。そして「命令すること」は「主人であること」である。だから私は主人であろうと、する限り命令する。この命令において命令は主人の「意のままに」なされるのであり、それが主人が主人であるということである。命令する者は「遂行せよ」という命令に聴き従い、「意のまま」にされた指令を實現し、「そうして自己自身に聴き従う」。他人にではな

く「自己自身」に聴き従うこと、自己自身の「意のまま」にすることがまさしく自己が主人であることに他ならないからである。

だが同時にハイデガーは、「命令する者は、自己自身までも賭けることによって、自己自身を卓越している」、また「命令することは自己・超克であり、ときとして、聴き従うことより困難である」と言う。

ここでわれわれは立ち止まらざるをえない。なぜなら、「自己の意のままにする」とことと「自己自身を卓越する」ことは矛盾するものであるかのように見え、「自己に聴き従うこと」が同時に「自己・超克」であるということもまた疑問に思えるからである。

「力への意志」は「主人であろうと・する意志」であり、単なる願望や志向としてではなく命令として「主人である」ことを引き受ける意志であるとされた。さらに、「主人であろうと・する意志」は自己自身が「主人である」ためにまず主人である「自己自身に聴き従うこと」を命じるのであり、それができない者にのみ、つまり自己自身に聴き従えない者にのみ命令がなされなければならないともされた。このとき命令とはまさに「自己自身に聴き従うこと」を命じる命令であり、「主人であろうと・する」ことを命じる命令である⁽²⁾。

ではなぜ、「自己自身に聴き従え」ということが「自己・超克」の命令となるのか？

それは、通常の私が自己自身に聴き従わないからである。

私は自己自身に聴き従わずに他者に（あるいは「常識」に）従っている。それは私が「主人であること」ではもちろんない。だが私はそもそも、自分が「主人」であることなどできるわけがないと信じている。「もし主人になれたら……」という「非現実的な願望や志向」を仮に私が持つことがあったとしても、まさにそれを「願望の領域に置く」ことで私は私自身と「主人であること」を切り離し、私が「実際に主人であろうと・する」という危険を上手く回避するのである。私が「主人であろうと・する」ことは危険なのだ。

この危険は、力への意志が常に「権力(Gewalt)を行使する」とであることから生じる。力への意志が(Gewalt)（暴力、権力）への意志である限り、その意志はすべてのものに對する支配、「権力行使」として実現する。その対象は私の関係するすべてのもの、「有るもののすべて」、つまり私の住むこの世界であり私の周囲の人々である。私はここに住み、この人々の間で生きてきた。その、これまで私が従ってきたこの世界・人々との関係性を、私が超克・支配し、私が従属してきた／私を従属させてきた関係性を私が否定するのである。その「中」でこれからも安定して守られてあることをではなく、それを内部から破壊し突き破ることを選択することが、私が「主人であろうと・する」ということなのだ。私の「力への意志」は、これまで私が住んできた周囲の世界

や関係性から／私の「故郷」から私を孤立させ、私を私の親しい者たちに向かつて反逆させるのである。

だからこそ私が主人であろうと・することは、この突破へと自己自身を賭けることⅡ「自己・超克」であらざるをえない。それは私がそれまでの私を越えること、それまでの私の世界を越えて行くことである。私はその命令を聞き、これまでの自己・これまでの故郷を棄てて行くのである。

それが「自己自身に聴き従う」ことだとニーチェハイデガーは言うのだ。

Ⅱ

しかしながら、人間は、偶然の見解や願望にしたがつて事物に恣意的な暴力を加えることによって「主人」になるのではない。主人になるとは、まず、力の本質に属する力の授与のための命令に自分自身を従わせることを意味する。衝動は、力への意志という種類の自らの本質を、まず「大きな」情熱として、すなわち、その本質において純粹な力に満たされた情熱として見出す。衝動は、「そこへと身を」賭し、そうしてそれ自身「裁き手であり、復讐者であり、犠牲である」(ツアラトストラはこう語った、第一部、「自己超克について」)。(GASO 53)

こうして私は越えて行く。だがどこへ？ 「自己自身へ」である。

私の持つ力への意志が「主人であろうと・する」意志であるとするれば、それは私が他のものの支配に従うのでも、また他のものが私に与える規定に従うのでもなく、すべてを私の意のままにすることを意味する。しかし前述したように常に私は私を規定する世界の中に住んでいるがゆえに、私の自己自身の取り戻しとこの世界の突破とは一である。世界を突破することなしに私は主人であることができず、主人であろうとすれば私は世界を突破せざるをえない。自己への逆行は常にこの二者択一の熾烈さの中で生起する。そして「力への意志は、この一なる意志の唯一の高さから、まさに自分自身だけを意志するのである。」(GASO 57)

だが、ここで取り戻される自己自身とは「何」か？

例えばそれは何かの人格的理想を体現した目標のようなものではもちろんない。世間から認められた何らかの役割的記号に「なる」ことでもない。今の自分が「成長」することでもない。今よりも「より良く」なることでさえない。「より良く」や「成長」に含意されている価値の数直線は、まさに私が突破すべきこの世界の、すなわち「他者の」価値体系だからである⁽³⁾。これまでにこの世界の／他者の価値体系に基づいて裁かれ取り込まれてきた私は、今度は主人Ⅱ裁き手として、従来の世界が私を回収す

るあらゆる記号に対して「それは私ではない」という否定(negation)を与えなければならない。私は世界に対する裁き手であり復讐者なのである。

だがそうだとすれば、この私が越えていくその先、目指すべき私の「自己自身」とは何なのか。

目指すべき「自己自身」は現在するすべての表象を拒否して空である⁽⁴⁾。

「力の本質には、目標の・自由と、それゆえに全体においては目標の・喪失性が属している」(傍点引用者G2033)のであり、力への意志は拒否する意志^{II}越えていく意志として所与のあらゆる表象、あらゆる価値を拒否する。このとき「自由」は^{自由}と^{自由}というその語の両義的な意味において「自由」であり「空」である。Occupied(占領)されていないこと、空いていることがなによりもまず^{自由}の意味であつてみれば、「力」は私を「自由」にするもの、私という場所を占有するすべてのものを払い除ける「力」である。私の与える否定は常に「無制約的」である。それは、それまでの記号だけではなくあらゆる記号による私の占領を、「目標」なるものによる私の占有をそのつど越え、そのつど私という場所を「空」にする。越えて行くこの越境こそが私を解放するのである。

こうして私は越えて行く。私は常にこの世界の岸边から離れていく。私が私であるために、私はこのこの固定と安定を棄て、

ここから離れていかなければならない。私は私であるがゆえに真に私であらねばならず、だからこそ常に私は真に私にならなければならない／占領を外した私に、真の私に還らなければならない／真に私を取り戻さなければならない。この遡行こそ私が私であることの条件であり、私が私自身に向かう可能性はこの遡行にしかない。

こうして私が私であることと私になることは継ぎ目なく終わりのない循環である。私は真の私(占領されていない私)への遡行を常に私のいるその都度のここから開始しなければならない。だがそれは私が占領されている私であるからこそ起きる欲望であり可能性である。だから私はいつも、「主人であろうと」してこの私を棄て私のこの場所から出て行く。出て行く突破はそれ自体が私の取り戻しであり私になることである。だが同時に、私が私の場所を突破し出て行くことができるのは、この世界の中で占領されている私が実は常に既に、「真の私である」からに他ならない。私は既にいつでも真の本来の私であるからこそ、しかもこの世界で占領されている私であるからこそ、真に本来の私であることの取り戻しを求めて私になる遡行を、私であることへの遡行を、私であるゆえの遡行を、つまりこの世界とこの私の突破を断行するのである。

それは私への回帰である。回帰するのは常に私である。私が私に回帰するのである。この回帰／私になること^{II}私であることの

取り戻しは、そのつどの私において、そのつどの私に全的に委ねられている私である可能性のすべてである。遡行の停止が真の私であることになる可能性の放棄であるとすれば、そしてそれが私である私によって拒絶されざるをえないとすれば、私は私を取り戻すという私への回帰を、真の私であるという初めての生成を、私になる私であるという同一物の回帰を、永遠に私のいるそのつどの場所ですべていかなければならない。私は絶えず私に回帰し生成を命ずる命令の内にある。「回帰する「同一物」は、その同一性をそのたびごとに新しい命令の内にかけている」(GA5058)。そして「そのたびごとに新しい命令」は、この命ずるのだ、「真に私であれ」と。

この回帰はそのつど永遠に始められなければならない。だからこそ「力への意志」の代わりに、ニーチェは時として「動力」とも言う。そして、彼は動力を(とりわけ自然の動力も)、常に力への意志として理解する」(GA5033)のだ。

力への意志は離れる力への欲望であり、突破する力への欲望である。

力への意志は、自己自身を力で凌駕することとして実質的に自己自身へと遡行し、そのようにして有るもの全体に、すなわち「生成」に、動性の比類ない性格を与える。……

力への意志は、力による凌駕として、常に自らの本質への途上にある。力への意志は、永遠に動的である。とはいえず、「目標」というものが、力への意志の外部にそれ自身で存続している状態を依然として意味するかぎり、力への意志は同時にまさしく無目標でなければならない。(GA5033)

III

「有るものすべて」／世界と人々に対して「主人であろうとする」ことがニヒリズムであるのはその理由からである。「ニーチェは、極端なニヒリズムの持つこの性格、つまり、空間を創造しつつ自由な開けに歩み出るこの性格に着眼して、「脱自的なニヒリズム」(力への意志、第一六卷、一〇五五番、三九三頁を参照)とも語る」(GA5029)。

絶えず私を植民地化し私を同一化する世界を、またこの世界という故郷で生きるために自ら植民地化されようと欲する私の世界への私の取り縋りを、私の力への意志は拒否する。この力への意志、「私はそうではない、nicht」と言う、まさにこの nicht の力が私をこの世界の束縛の外に、未だ無い新しい空間へ帰還させ、その空間において解放するのである。ニヒリズムに力への意志は私を動かすこの動力であり、真の自己自身を生成させる欲望であ

る。「したがってニヒリズムは、単なる無的狀態を目指して進んでいくのではない。その本来的本質は、解放という肯定的な状態に存している。ニヒリズムとは、すべての価値の全き転換に向けられた、従来の諸価値の価値喪失である。このように遙か後方と前方に同時に広がりつつ、常に決断的な向かい行きなのかに、歴史としてのニヒリズムの根本動向が覆蔵されているのである。」

(GA40:25)

本来私は生成する者なのである。生成する者として本来私は絶えず私の今のこの場所を超えていく者¹⁾超人である。「超えていく者」、本来生成する者の本質である「いかなる固定にも反対する本質的な嫌悪」(GA50:59)に突き動かされて私は“nicht”と云い、真の自己自身を欲望し、この世界から出て行く。本来生成する者である私の力が私を固定する表象に対して“nicht”と云うのだ。

「超人」という名称における「超」は一つの否定を含んでおり、従来の人間の「彼方へ」超え去ること、越え行くことを意味してこそ²⁾ (GA50:41)。だとすれば「超人」は「超感性的な理想」ではない。それはまた、いか自らを告知してどこかに現れる「人格」ではない。超人は、完成された主体性の最高の主体として力への意志の純粹な力の発揮である³⁾ (傍点引用者 GA50:51)。

だからこそ私には「そのために「ハンマー」が必要である。このハンマーによって、類型は型取られ、鍛錬され、すべての従来のものは、自らに不適切なゆえに粉砕される」(GA50:59)から

である。

「すべての従来のものの」、あらゆる所与の表象は「自らに不適切」なのだ。それは「従来」のもの、「外」から来たものであって「私自身のもの」ではないからである。私は私を方向づけ、世界の価値の体系の中に私自身を嵌め込むこれらすべての「従来の類型」をハンマーで破壊する。この私の“nicht”は無制約的であり、あらゆるものが破壊されなければならない。だが同時にこのハンマーは別の一つの類型を打ち込むのだ。「超人とは、自己自身を初めて類型として意志し、自らこの類型へと打ち込む人間存在域、その人間存在域の類型である⁴⁾」(傍点引用者 GA50:59)。

この類型とは「超えていく者」という型である。あらゆる鑄型を破壊する者、予め世界によって準備されたあらゆる鑄型を壊し、世界に現象するその都度の私という表象をも壊し、ただその都度の nicht によって、その都度新しく初めて私自身を解放していく、永遠に超えていく者としての「超人」である。

私はあらゆる類型に対して nicht と云わなければならない。

それはもちろん私を型取りし従来の類型に嵌め込む世界を拒否しなければ私が私自身になる⁵⁾であることはできないからである。

しかしそれだけではない。

私の nicht は何よりもまず、私が私自身に対して準備する鑄型

に対して向けられるのである。なぜなら私を鑄造するのは私だからである。

私はこの私の世界で生きていくためにこの世界が求める価値体系を身に付けてしまっている／この世界を身体化してしまっている。その私が私のために描く下絵はどんなものであろうと私を世界の一部にするもの、私を世界に適合させるものである。世界の中でこれまで形成されてきた私は既に世界の代弁者であり、私の語る声は私の声ではなく既に世界の声である。同じく私の判断は世界の判断であり、私の真理は世界の真理である。それがこの私に可能な声のすべて、判断のすべてであり、私が描く類型のすべてなのである。私は世界Ⅱ私に、常に既にすみずみまで表象化され私自身を所有されてしまっているのである。その私が私の「理想」や「目標」を通して私を鑄造するのだ。世界の価値体系を身体化したその私が私を世界に代わって裁くのである。

だとすれば私が *non*・it を言わなければならないのは他でもないこの私の表象作用に対して、つまり私を世界に適合させる私の理性それ自身に対してである。

この私の理性、この私の真理は「誤謬」である。それは私を私ではないものとして表象し、私を私ではないものの鑄型に当て嵌め、私を私ではないものにするからである。

ハイデガーは言う。

真理が依然としてある種の「誤謬」であり「欺瞞」であり続けるのは、それが、周知のものでありながらいまだ展開されていない真理概念、つまり現実的なものへの適合としての真理概念にしたがつて思惟される限りにおいてのみである。それに対して、有るもの全体を「同一物の永劫回帰」として思惟する企投は、建設し、排除し、破壊する、かの卓抜たる思惟様式という意味における「思惟」である。この思惟様式は、「生それ自体の最高の代弁者」である。(傍点引用者 CASO 75)

私は既に私を植民地化する世界の代弁者である。

私は私の代弁者ではない。そして私は「生それ自体の代弁者」ではない。

IV

「生それ自身の代弁者」とは何か。

珍しく長くニーチェを引用してハイデガーは言う。

「しかし、目覚めた者、知者は言う、私はどこまでも身体であって、それ以外の何物でもない、と。魂とは、身体における何ものかを表すひとつの語に過ぎない。身体は大き

な理性、ひとつの意味をもつ多様性、戦争であり平和、畜群であり牧人である。わが兄弟よ、お前が『精神』と名づけるお前の小さな理性もまたお前の身体の道具、お前の大きな理性の小さな道具、玩具なのだ（ツアラトウストラはこう語った、第一部「身体の軽蔑者たちについて」。従来の形而上学における人間の本質の卓越的特徴、つまり理性的性格は、身体を持った力への意志という意味での動物性に置き移されるのである。（傍点引用者 GAS043）

私の理性は「小さい」。それは身体という「大きな」理性の小さな道具ではない。この「小さな理性」すなわち「精神」が「私それ自体」を鑄造するとすればそれは常に誤謬であり、「私自身」に対する暴力である。「小さな理性」は「私の代弁者」でもなく「生それ自体の代弁者」でもない。にもかかわらず私・たちはこの「精神」＝「小さな理性」が創造した世界の中で、その「小さな」理性を「理性それ自体」「私それ自体」と混同し、小さなものによる大きなものの支配を許してきたのである。

「小さな理性」はいつも言うのだ、既存の価値体系に従っていないなければならない、と。私の「小さな理性」は世界に「現実的なもの」として存在する既存の価値体系へ適合するものが「真理」であって「正しく（良く）」、適合しないものが「誤謬」であって「間違っている（悪い）」と分節化し、その分節化に私を従

わせてきたのである。だが、こうした「真理」は「誤謬」である。なぜならそれは部分ではないもの＝「現実的なもの」（現象するもの）を全体化するからであり、しかも、そもそもこの「現実的なもの」は、常に移り変わる現実の現象それ自体ではなく理性にとつて把握可能な固定化された記号でしかないからである。

「記号」は「現実」ではない。それは移り変わる世界の片鱗でさえなく、それが世界であると「小さな理性」が信じて固定する世界「像」、ただ単に「小さな理性」にとつて、「現実的に見えるもの」ではない。だとすればこの私の「小さな理性」は私である「大きな理性」を損なってきただけではなく、「世界」それ自体をも全く損なってきたことになる⁽⁶⁾。

「誤謬」は正されなければならない。損なわれたものは回復されなければならない。そしてこの回復をなすのは「真に「正しい」ものを」建設し、（なされてきた「真理＝誤謬」を）排除し、（私の小さな理性の行う分節化を）破壊する「思惟」である。この思惟こそ「正義」なのだ。

思惟の様式は「建設的」である。それは、現存するものとしていまだ全く存立していないもの、そしてたぶん決して存立しないものを建造する。建造は設立である。それは高みへ向かい、しかも、それによって高みが初めてそのものとして獲得され開き出される。……

「建設する」思惟は、同時に「排除的」である。この様式によって、思惟は、その建設を担い得るものを作り、固定して建設を危うくするものを拒絶する。……

建設し・排除する思惟は、同時に「破壊的」である。硬化化として、また下降させるものとして、建設しつつ高みへ・向かうことを妨げるものを、この思惟は粉碎する。破壊は、降下へのすべての制約が押し寄せることに抗して安全を確保する。建設することは排除することを要求する。すなわち、いかなる（創造としての）破壊のなかにも粉碎することが算入されている。（傍点引用者 GAS070）

あるべきであるものをあらしめ、損なわれたものを回復するもののこそ「正義」であるとすれば、「大きな理性」による「小さな理性」の専制のこの破壊こそ正義である。誤謬を正すことが「正しい」ことであるとすれば、当然のことながら誤謬としての「真理」、適合としての「真理」、「小さな理性」が依拠する「正しさ」としての「真理」を破壊することが「正しいこと」であり「正義」である。従来の世界の価値体系に「適合」させることはもはや「正義」ではなく私自身を「降下」させる「暴力」であり、従来の「正義」を破壊する「暴力」こそ「正義」となる。そしてこの暴力（Gewalt）としての正義、損なわれた生それ自身の代弁者としての「正義」が、損なったものを排除し、損なわれたもの

にもう一度現前化の空間を開けてやるのである。

この正義を執行することこそ力への意志である。それは私が私自身である¹¹になる再現前化の空間、私が「従う者」ではなく「主人であろうと・する」空間である。小さな理性の奴隷であることを拒絶して私は小さな理性の支配者となる¹²。そしてこの取り戻しにおいて「目覚めた者」¹³「知者」は言うのだ、「私はどこまでも身体であつて、それ以外の何物でもない」、と。

「身体」は「大きな理性、ひとつの意味をもつ多様性、戦争であり平和、畜群であり牧人」である。これにわれわれは付け加えても良いだろう、身体は善であり悪、「正義」であり不正、「小さな理性」が厳しく切り分けてきた対立項をすべてひとつに現象させる身体¹⁴混沌である、と⁽⁸⁾。

私の身体はあらゆることが起きる身体である。「従来の」世界の価値体系に、すなわち小さな理性の命令に「従う¹⁵適合する」身体ではなく、「小さな理性」が当て嵌めようとする固定した記号と分節化を超えるあらゆるものが生起する身体である。

私は「小さな理性」の分節化を超えるあらゆるものを生起させる身体なのである。

V

それ（引用者注：動物性）はもはや、単なる感性、人間におけ

る下位のものとはみなされない。動物性とは、身体を持った (leibend)、すなわち内発的な衝動に満ちてすべてを過度に突き動かす「身体」である。身体という名称は、生それ自体を「意志する」すべての衝動、圧迫、苦悩の支配構成体の際立った統一を名づけている。動物性は、身体を持つて生きることによって、力への意志という様態においてあるのである。

この力への意志が、すべての有るものの根本性格を規定するかぎり、動物性が初めて、人間をひとつの真に有るものへと規定する。理性は、身体を持った理性としてのみ「生きた」理性である。(傍点引用者 GAO 42-43) ⁽⁹⁾

動物性とは「内発的な衝動に満ちてすべてを過度に突き動かす」身体である。それは常に「過度」である。なぜならそう判断するのが「小さな理性」だからである。だがそもそも動物性としての身体は「動く」のだ。それを常に私の「小さな理性」は怖れ、見張り、支配する。衝動に任せて動いていては「何が起きるかわからない」からである。身体が「内発的衝動に満ちて」動くことはそれ自体、「小さな理性」からすればいつでも「過度」で「不適切」である。

こうして、この私という場で、私を植民地化する「小さな理性」が「私が生きる」ための理性力への意志と抗争する⁽¹⁰⁾。この身体と理性との抗争の場こそ私である。

だが、「小さな理性」を暴力的に破壊し、「小さな理性」の怖れを超え、私が真の私として「生きる」こと、真の私へと超えていくことは、まさに、私が理性を破壊し、理性を持つ人間であることを放棄し、動物性身体として生きることによって他ならない。それは私が「人間」であることを棄て、「人間」ではないものになるという選択である。

超人とは、従来の人間のありふれた暴力行為の専横を粗雑に拡大することを意味するのではない。存続している人間を過度に押し拡げるだけのいづれの膨張とも異なり、超人への歩みは従来の人間を本質的に「転倒されたもの」に変容させる。この転倒された人間は、また単に「新しい典型の」人間を立て開くだけではなく、ニヒリズム的に転倒された人間が初めて、典型としての人間である。(GAOS 55)

人間ではないものが「初めて、典型としての人間である」とハイデガーは言う。「人間」の標である理性を棄て身体であることよって初めて「人間」が生まれるのだ、と。

ハイデガーはこうも言う。

人間の動物性が、その本質としての力への意志に引き戻されているとき、人間はついに「確立された動物」となる。

……それに対して、卓越的特徴がただ理性のうちにのみ求められる従来の人間は、どこまでも「いまだ確立されざる動物」である。(第一三卷、六六七番、二七六頁)。したがって「人間化」(Vernenschlichung)とは、ニヒリズム的に思惟されるなら、まず、理性の優位を「身体」の優位に転倒することを通して人間を人間にすること、それから同時に、有るものそのものをこの転倒された人間に従って解釈することの意味する。それゆえニーチェは、『人間化』——は、先入観に満ちた語であり、私の耳には、君たちの耳においてとおよそ逆に響く(第一三卷、四六六番、二〇六頁)と語り得るのである。人間化の逆のもの、すなわち超人による人間化は、「脱人間化」(Entmenslichung)である。それは、有るものを従来の価値設定から開放する。この脱人間化により、有るものは力への意志に属する支配構成体の力の發揮かつ闘いとして、すなわち「混沌」として、「赤裸々に」示される。こうして有るものは、その有の本質に基づいて純粹、すなわち「自然」である。(傍点、ハイデガー、傍点引用者 GASO 34)

「人間」という枠に所属するかぎり、すべての私は植民地化された私である。植民地化された者として私は「いまだ確立されざる動物」である。

これに対し、「人間の動物性が、その本質としての力への意志に引き戻されているとき、人間はついに「確立された動物」となる」。理性によつて下位に置かれ部分化され支配されてきた身体性動物性が、この「小さな理性」を破壊して自らを解放する力への意志へと引き戻されるとき、私は「確立された動物」である。「暴力」によつて「人間」から「動物性」へと「ニヒリズム的に転倒された人間」、すなわち「理性の持つ従来の優位から動物性それ自体への優位への転倒」(GASO 46)を遂げた人間、自らを転倒した私は、これまで私が抛り所にしてきた理性を棄て、この世界の体系それ自体を、従来の「人間」のあり方を超えていく。このとき私は「確立された動物」として典型としての人間となる。だがそれは私がこの世界の「例外者」になるということではない。

超人の見かけ上の捉え難さは、次のような厳しさを指し示している。それは、力への意志のこの本来的な主体を通して、いかなる固定にも反対する本質的な嫌悪が、つまり、力の本質を際立たせるその嫌悪が把握される際の厳しさである。単なる例外者という不毛な傍観とは無関係な超人の偉大さは、彼が力への意志の本質を、ひとつの人間存在域の意志の内に置くことに存している。その人間存在域は、それを意志することにおいて、自己自身を大地の支配者と

私は「例外者」ではない。私は大地の支配者として主人である。

「主人であろうと、する」ことは従来の価値体系における価値あるものを占有することでもなければ、その価値体系の中で自己を拡張することでもない⁽¹⁾。真に主人であろうと、することは、まことに真に主人であろうと、することである。それは他に一切の主人を置かないということ、私があらゆるものの主人であり裁定者であることを意味する。だとすれば転倒された人間を超えていく者としての超人は世界の外に行くのではない、自らをまさにこの世界の支配者として意志するのである。人間世界だけではない、境界線も刻み目も無い大地の支配者として自己自身を意志するのである⁽¹²⁾。

それが、私が真に「主人であろうと、する」ことである。

大地の支配者として私は私の正義、私の力への意志を有するものすべての上に振るう。その正義とは、支配する小さな理性を破壊することである。有るものを分節化し表象し、類型に入れ固定化してきた暴力表象作用を固定化を破壊し、あらゆるものから一切の類型を取り除くことである。

破壊を通して私が創造するのは支配者である理性によって占領されていない空の空間であり、そこにおいてすべての有るものが本来の有るものであることを取り戻す空間である。そのために

私は「人間」の標である理性を棄て、動物性としての身体を選択するのである。そのために私は、私の理性を棄てて行くのである。それこそ力への意志であり正義である。

そのことによって私は、有るものを有るもの自身に還してやるのだ。そしてこの私の大地の上に、これまで分節化されてきたものすべて、表象されてきたものすべて、所有されてきたものすべて、有るものすべてを、その本来の有るものに、再び、初めて、回帰させるのである。

「この脱人間化により、有るものは力への意志に属する支配構成体の力の發揮かつ闘いとして、すなわち「混沌」として、「赤裸々に」示される」。「こうして有るものは、その有の本質に基づいて純粹、すなわち「自然」である」。

超えていくこと。それは私が世界の外に出て行くことではないのだ。

私は創造者として未だ無い新しい世界の「主人であろうと、する」のである。

私は有るものすべて、生それ自体の代弁者となるのである。そしてそれこそが「初めて、典型としての人間」なのである。

私は見えないところに行く。

この小さな理性のパスpekティブには決して写らない世界、私の小さな理性のパスpekティブ^{II}遠近法では見えない世界に私は行く。

それはここに現象する世界である。だがこの現在形「現象する」は今現在既に「現象している」あるいは「現象してきた」という完了形ではない。またそれは「現象するだろう」という未来形でもない。「現象してきた／＼している」という完了形は小さな遠近法がそう立ててきた解釈であり、「現象するだろう」という未来形は小さな遠近法が完了形を敷衍して立てる予測ではない。

現在形である「現象する」のかたちにおいて、私の自己自身と有るものすべては自らが現象することを今／常に／既に待一期している。「現象している」このこの分節化の下に、「現象」させられてきたもの、分節化され自らの身体に切れ目を入れられてきたものが、常に、もう既に存在しているのだ。

これらあらゆる有るものを支配してきた私の小さな理性を私は破壊する。だが、その小さな理性／有るものを判断し分節化する理性が、私がものを「見る」唯一の手段であつてみれば、その理性を棄てた私に、ここに「現象する」世界が「見える」はずはない。もとより「現象する」ものの姿は判断する私の理性^{II}私のパスpekティブを遥かに超えたもの、私の視野を遥かに超える大きな遠近法の地平に存在するもの、僅かに見える欠片によつて

分節化されることを拒んで遠くに屹立する全体である。それは私が見ることのできない、だが「現象する」全体である。

それを切り分け、生じて良いものと悪いものに区画してきたのが小さな理性である。われわれ自身の持つ内発的な衝動を抑圧し動物性を支配するために「人間」は罪悪感を、あるいは罪と罰を發明してきたのだ。その罪悪感を棄て内発的衝動に任せて「自在に」生きることへと存在を解放するのは小さな理性にとつて恐怖以外の何ものでもない。しかしまことに私がこの大地の支配者であるとすれば、私の大地に介入し、私の大地に在る有るものを植民地化し奴隷化し所有するものを私は破壊しなければならぬ。有るものすべて、すべてのもののその隔々にまで介入する小さな理性の怖れを、その分節化・判断・予測・計算・準備・計らいのすべてを、そして適合しないものにそれが与える罪と責めのすべてを私は破壊しなければならぬ。

大地を支配するのは私なのである。

私は大地を支配する／他の介入を破壊する／それが「主人である」とする。私の責任のすべてである。

そして何よりもまずこの私の大地に有るものに介入しているのが私自身の小さな理性であるとすれば、私はすべてのものを善と悪に当て嵌め、罪と罰で操作する価値の遠近法を、すなわち私自身の理性を破壊しなければならぬ。本来私の小さな理性には見えず分からない有るもの本来の姿を小さく卑近な遠近法に閉

じ込め、怖れに基づいてすべての有るものを押し殺してきたこの私自身の理性を破壊しなければならない。私は、私の大地において生じるものが生じることを、私の大地において有るものが有るものであり、文字通りその動物的・内発的衝動に任せてなるがままにあることを、怖れ介入する私自身の理性に抗してそのまま生じさせなければならない。

私はハンマーなのである。私は介入し支配するものを破壊するハンマーであり、有るものを有るものそのままに生じさせる空間を空けるハンマーなのである。

だがこの破壊は優しい。

私であるハンマーが破壊するのは構築された檻である。ハンマーが破壊するのは世界を拘束し有るものを拘束し私を拘束する檻／拘束衣、だけである。

そして、この檻を破壊するその仕方は単純に私がその檻をただ出ること、拘束衣を破壊するその仕方は私がその拘束衣をただ脱ぐこと、だけである。

私はただ「外」に出れば良いのだ。まるで暗い映画館から外に出て昼の光の中で我を取り戻す子供たちのように、あるいは回っていたのは太陽ではなく地球だったと分かってしまったブルーノのように、「ほんとうのこと」を取り戻せばよいのだ。見ていたものが小さな理性のフィクションだったことを、実際の世界は

私には何も見えていず何も分かっていなかったことを、私は私の眼を開けてただ取り戻せばよいのだ。眼を開けて「外」に出た瞬間に「現実」は消える。檻は壊れ、私を拘束していた拘束衣は消える。檻を壊すのではない、檻は壊れるのだ。檻は無かったのである。

それを「暴力」だと非難するのは天動説の映像を「現実」と信じて実体化し、映画館の暗闇にしがみつき続ける小さな理性である。私の小さな理性はいつもそうして「現実」を「認識」し「努力」し「計算」し「操作」してきたのだ。

外は明るい。

「ここ」は小さな理性の物語ではない。「ここ」は「外」であり、理性が支配する場所ではないところ、理性を超えるあらゆるものが生起する場所、有るものが有る場所、現実の世界なのである。

真に有るものの姿は私の理性の視野を遥かに超えている。

私はずっと盲目であり、しかもこの小さな遠近法であらゆる有るものを鑄型に嵌め、他者を蹂躪し、私自身を縛り、損なってきたのである。私の眼には見えないからという理由で地動説を拒絶しブルーノを火刑に処したのである。私が小さな理性の支配を許し、この小さな理性の小さな遠近法によって、生じようとするすべての有るものを、そして生きようとする私自身を植民地化し奴

隸化し封殺してきたのである。

私に可能なのは、ただ、私には見えないのだという単純な事実を受け入れることだけである。

見えないまま、私の小さな遠近法には捉えられないまま私は私の大地を開く。見えないまま私はそれを、すべての怖れと判断と予測と計算を放棄して待つ。

それは生じるものをすべて生じさせるということである。

生じるものをすべて生じさせることが私の責任である。

生じるものそれ自体に一切の区別は無い。生じるものそれ自体に善悪は無く価値の上下も罪も罰も無い。それらはただ動物性において、内発的衝動に満ちて生じるもの、ただ生じるもの、ただ有るもの、一切の区別を持たないもの、「純粹であり自然」である。

正義を取り戻すことは恵みである。

あらゆる有るものを回復し、他者を回復し、私自身を回復することは恵みである。

有るものをすべて手放すことは、私自身を手放す解放することである。

理性が煩く掻き立ててくる一切の罪悪感を棄て、あらゆる有る

ものを罪悪感で縛ることを棄て、流れるその瞬間に生きることとは内発的衝動に突き動かされて生きることである。私が生きること、自らが在ることは一切の善悪と罪と「責任」の無い今を自・在に在ることである。私は過去を分節化して責め後悔する時間を持たない。未来を分節化して怖れ準備する時間を持たない。流れていくこの瞬間にしか私は生きる時間を持たない。瞬間ごとに生起する時間の中で、瞬間ごとに生起するあらゆる有るものの中で私は生きる。小さな理性の計算を超え、内発的衝動に突き動かされて私は過度に生きる。それは私の「理性」を外していくことである。分からないまますべてを手放すこと、すべてを私には見えない大きな遠近法に委ねて檻を空にし手放すことが真に生きる私の責任のすべてである。私が常に永遠に「外」において「外」にあること、この明るい大地に有るものすべてをその拘束衣から守るということ、一切の裁き手を持たず、常に纏わり付く／私を裁く檻と拘束衣を私自身が脱ぎ続けていくということが、私が「主人であろうとする」その責任のすべてである。

この私の大地の上で、あらゆることをその内発的な衝動に完全に任せて生じさせることが私の責任のすべてである。

それが、私がこの大地の支配者であるということである。

私は見えないところに行く。

だがそれこそが「生」ではないのか？ それこそが、私が生き

ということではないのか？

小さな理性が怖れ操作しようとするこのすべて、「無事」であること、「悪いことが起きない」こと、「何」も起きないことは死の彼岸にしかなく生はこの小さな遠近法を超えているのだとすれば、生はただ生として存在しているのだとすれば、ニーチェの言う「無制約的な否定」とは生のこの此岸を取り戻すことに他ならない。

私はハンマーである。

私は私の身体に小さな理性が刻んできた境界線を破壊するハンマーである。私は、私の身体である大地に、有るもののすべてに今もなお小さな理性が刻み込み続けている境界線を破壊し続けていく者である。

大地は私の身体である。

あらゆる理想と目標と裁きと罪のすべてから解放されて私はこの今という「外」に生きる。

その空間において正義は、まだ現前化していないすべての有るものを、そして私自身を待一期する。

私は私に回帰する。

大地が私において回帰する。

それを私は私の身体とともに待つのだ。

※略号 GA50 は、Heidegger, Gesamtausgabe, Nietzsches Metaphysik, Vittorio Klossmann, Frankfurt a. M. 1990 からの引用であり、続く数字は頁数を示すものである。

註

(1) 「権力を持てばよいのに」と言う者はその言において即ち「権力のない者」として自己を現象／存在させてしまう。

(2) この「命令において」私は自己自身に聴き従い「命令する」のである。

(3) 「この世界の価値体系」に従って向上していくことⅡ「成長」は、この世界の価値体系を肯定し、この世界による私の占領を肯定することである。それは占領された「今の自己」を延長的に「存続」させることである。

(4) それは「既に今在るもの」ではない。われわれが持ち合わせているこの世界の表象では語れないもの、まだ現象していないもの、未だ無いもの、それにもかかわらずまさにこの私として・この私の場所において・取り戻されていない私として存在しているもの、目に見える (positive) 私の上に求められている見えない (negative) もの、それが「自己自身」である。

(5)

ここで言われる「類型」とは当然のことながら従来の類型（固定された鋳型＝世界内の従来のひとつの記号）ではない。超人が意志する類型とは、言ってみれば「あらゆる類型を破壊し超えていくという類型」である。

(6)

拒否されなければならないのは言うまでもなく「有るもの」の「固定」である。「有るもの」を存続させる「存続化は、生成するものをそのつど固定する。したがって、真なるものは、それが存続的なものであるがゆえに、生成という性質を持つ現実的なものを、まさしく実際にそうではないように表象する。こうして、真なるものは、真理の本質が、久しく一般的になっている形而上学的規定の意味において、事柄への表象の適合として思惟される場合には、生成するものと言う意味での「有るもの」、すなわち本来の「現実的なもの」にふさわしくないものであり、したがって偽なるものとなる。」（傍点、ハイデガー、傍点引用者 GA50 63）。

ここで言われる「真なるもの」とはいわゆる形而上学が「真なるもの」として切り取り、表象し、実体化させた「存在者」である。この「存在者」は無数の多様なものを「同一の」表象へと置き移し、「同一の」存在者として存在させ存続させる。形而上学によってこのように存続化させられた表象としての「存在者」は同一物として存続する。しかし「現実的」に存在するものは、形而上学が切り取った表象ではない。したがって「現

実的なもの」は表象としての「真なるもの」ではなく、形而上

学が存在者を存続者として檻に入れる表象化の試みは常に暴力であり、真なるものは常に偽である、ということになる。したがって表象に固定された存在は常に「偽である」。

(7)

正義は、そのような思惟として、最高の高みを築きつつ登りつめることに基づいて自分自身に対する主人となることである。このことこそ、力への意志そのものの本質である。（GA50 71）

(8)

ハイデガーはこう言う。「有るもの全体が混沌である場合にのみ、力への意志としての有るもの全体に恒常的な可能性が、すなわち、相対的な持続のそのつど限定された支配構成体において自己を形成するための、つまり「有機的に」自己を形成するための恒常的な可能性が与えられ続ける。ただし、「混沌」は、盲目的に荒れ狂う混乱を意味するのではなく、有るもの全体の多様性を意味している。つまり、力の秩序に突進し、力の限界を画定しつつ、その限界をめぐる戦いのなかで常に決断をはらんだ有るもの全体の多様性である。」（GA50 37）

(9)

そもそも動物であることを「下位」のもの、「低い」とし、「人間」性を棄てることを「悪い」ととし、それを私に躊躇させ押しとどめるものこそ「小さな理性」である。私が身体であること、動物性であることを選択するのは、「理性・身体」と分割した上での「身体」の選択ではなく、「全体であること」の選択である。それは私が「小さな理性」＝部分を超えるという選

扱である。

(10) ハイデガーは次のように言う。「身体」とは、力への意志の形態

を表わす名称である。」(GASO48)

むしろそれこそ「小さな理性」が企図することだろう。

(12)(11) 大地に無数に引かれた「国境線」や、「山」と「川」、「海」と「陸」の区別もすべて「小さな理性」の刻んだ分節化である。

※本論文は、JSPS 科研費 [課題番号 26370006] の助成を受けたものである。

(いがらし・さちこ) 筑波大学人文社会系准教授